

巻 頭 言

大阪市立自然史博物館と友の会—連携と協働

大阪市立自然史博物館 谷 田 一 三

認定NPO法人大阪自然史センター（以下センター）の理事と理事長を歴任して十数年。大阪市立自然史博物館（以下博物館）の館長になってほぼ1年。この2つの組織を見た立場から、博物館とセンターが運営する博物館友の会（以下友の会）との間の連携についての私見を紹介したい。

友の会の歴史とNature Study

博物館の入館者は常設展と特別展を合わせて約35万人、無料で入館できる中学生以下が約8万人と1/4程度を占める。友の会の会員数は約1600名だが、友の会に入るとその家族も会員と同様の扱い（家族会員）になるので、恐らくは3000名を超えるファミリーが形成されている。入館者数と比べると少ないが、このなかにはヘビーユーザーや、論文や図鑑なども執筆するスーパーアマチュアがいる。毎年1月に開催される友の会総会では、行事への多数回参加者が表彰されるが、昨年のは138回の新記録だった。友の会会員の特典としては、博物館の常設展を無料で繰り返し観覧することだが、活動的な会員にとっての魅力は多彩な行事への参加であろう。

博物館は1949年に開館して、1955年には友の会の前身である大阪市立自然科学博物館後援会が作られ、今も刊行が続けられているNature Study（以下NS）が刊行されている。1958年には大阪自然科学研究会に、長居公園の新館完成と併せて1974年には大阪市立自然史博物館友の会へと名前

を変えている。日本の博物館友の会としては長い歴史を持っている。早くに友の会が設立され、NSが刊行されたのには皮肉な背景がある。博物館は、最初は天王寺の市立美術館に間借りして始まり、その後に戦災で焼け残った靉小学校の跡地に移転した。いずれも、現在の施設とは比べ物にならない貧弱な施設と展示で、学芸員の数も限られていた。建物や展示に替えて、重点をおいたのが野外での観察会や国内外の調査だと聞いている。日帰りの観察会は友の会行事の原点であり、刊行されていたNSは自然の情報を伝えるとともに、自然観察や標本作りの入門書だった。標本作り特集のNSは、当時小学生であった私のバイブルだった。

学術調査は、国内外で新聞社などの支援も受けながら実施していた。復帰直後の1953年のトカラ列島科学調査は、鹿児島県と朝日新聞社の支援を受け、筒井嘉隆館長ほか総勢22名に及び、その中には友の会のコアメンバーになった三木茂博士、馬場菊太郎博士、辻本修教諭なども含まれている。1958年には、ニューカレドニアを中心としたメラネシアへの総合調査隊も派遣された。国内外の学術調査の実態と成果は、また稿を改めて詳しく紹介したい。

博物館と友の会の行事

博物館主催と友の会主催の行事がある。それらの代表的な行事を紹介しながら、博物館と友の会

の連携を見ることにする。

博物館主催の行事としては、植物園案内、自然史オープンセミナー、ジオラボ、やさしい自然かんさつ会、テーマ別自然観察会、入門講座、室内実習、ジュニア自然史クラブなどがある。多くは毎月1回以上の頻度で開催されている。それに、博物館が委託して開催する行事としては、本館内や特別展会場で開かれる子どもワークショップ（毎月）がある。実物とハカセ（学芸員）を見つめる子供たちの目の輝きが楽しい。

友の会が主催する行事としては、月例ハイキング（毎月）、鳥類フィールドセミナー、裏庭ビオトープ（毎月）、年に一度の行事としては、総会・講演会、友の会秋祭り、友の会合宿、昆虫合宿などがある。

大阪自然史フェスティバルと大阪バードフェスティバルは、このところは交互に11月の関西文化の日に開催され、多くの自然史、鳥類関連の関西の団体、それに関連業者が集まる大祭である。博物館、センターと関西自然保護機構が共催する。2日間の参加者は2万人近く、参加団体は100程度になることもある。民間業者の協賛金と展示販売、自然関係団体の展示と熱意で成立している。

これ以外にも出前講義や講演依頼もあり、特別展の準備・開催と、当館の学芸員は、恐らくは日本でもっとも多忙な学芸員と、館長に就任してつくづくと思う。それでも、なんとか多くの行事を実施できているのは、友の会、センター、それに会員との連携がうまく機能しているからだ。

友の会・センターの組織と運営

友の会の主要な組織には、評議員会と事業ワーキンググループがある。年に4-5回は開かれる評議員会には評議員だけでなく学芸員も参加して、3-4時間かけてしっかりと議論し、行事や会の

運営を決める。新規行事や事業を決めるのは、若手の会員と学芸員を中心とした事業ワーキンググループで、これも夕方から頻繁に熱のこもった会合を繰り返す。このところ博物館の館長は2名の副会長のうち1名となっている。また、長く監事を務めているK氏は、博物館の事務方OBであるとともに、直翅類のスーパーアマチュアである。

行事における連携

博物館主催行事については基本的には個別の行事ごとに学芸員が企画立案する。その行事ごとに、友の会会員からボランティアで補助スタッフを募集する。他の博物館の展示ボランティアなどと違うところは、補助スタッフが担当学芸員から行事の事前研修を受けることである。例えば、やさしい自然観察会の「海への自然」では、前日の昼間に現地で観察採集をし、夜は宿舎で実体顕微鏡と図鑑を使って分類同定する。その知識を持って翌日の観察会に補助スタッフとして同行する。高度の知識と経験を学ぶ機会として、宿泊費を払っても参加する会員が少なくない。室内実習や近場の観察会の事前研修では、宿泊の必要はないが、事前研修は自然史知を学芸員から濃密に学ぶチャンスである。ジュニア自然史クラブは、次世代の自然史愛好家、さらには研究者の養成のためにはじめた。自然史に関する幅広いテーマを1年間にわたって学ぶ。この補助スタッフは年間を通じての登録者で、参加できる行事について補助する。ジュニアの卒業生の登録が多いようである。

友の会の行事では、月例ハイクがもっともオープンな行事で、非会員も保険料を負担すれば参加でき事前申し込みも不要である。ハイクの企画は評議員会で決められるが、学芸員よりは評議員が主体的に企画運営し、少なくとも1名の学芸員が補助に入る。他の評議員や学芸員も手伝いに入り、

例えば地質と川虫など異分野の自然観察を同日に行うことも多い。人気のコースでは100名を越える参加者があり、観察の粗密が生まれることが課題ではある。

友の会合宿は、企画運営は主担の学芸員と評議員が相談して実施する。コースとテーマの選定、宿と交通手段の手配と、かなりの作業が伴う。安全確保のために、主担以外の評議員も加わり4～5人程度の世話役を作り、世話役は本番だけでなく下見にも参加することが求められる。40人以上の参加者にじっくりと自然観察としてもらうためには、世話役だけでは不足することもあるが、一般参加の学芸員やベテラン会員が助けに入る。昆虫入門としてはじまった昆虫合宿は、評議員が主体となって運営企画する。そこに昆虫担当の学芸員が1名は世話役として参加する。昼間の捕虫網による採集、夜間の灯火採集、ピットホールトラッ

プ採集、それに夜間は標本作りと同定会と、非常に密度の濃い宿泊行事となっている。

国内で催される自然観察会の多くは、講師から参加者への一方通行の知識の伝達が多いように思う。しかし、当博物館や友の会の行事では、そこにベテラン会員、スーパーアマチュアの会員とくに評議員が加わることで、双方向性の自然知の伝達機構が形成されている。昆虫をはじめとする多様な自然を相手にするには、館長を含めた15名の学芸員ではカバーできない。この時に、博物館を取り巻くスーパーアマチュアが活躍する。その実力が発揮される場の一つが、毎年8月末に開催される標本同定会である。

本自然史博物館の価値は、展示、コレクション、博物館内の人材だけに留まっていない。友の会やセンター、それに外来研究員を含む館を取り巻く人材や団体とそれらが持つ自然史知の集積にある。